

ピアジェ-ワロン論争の展開 (2)

—ワロン「行為から思考へ」におけるピアジェ批判—

加藤義信 (愛知淑徳大学) 亀谷和史 (日本福祉大学) 日下正一 (福島大学) 足立自朗 (埼玉大学)

論争の成立は、問題意識の共有を前提としている。問題が共通の問題として把握されて、そこで異なる解答が用意される時、そこから論争がはじまる。1920年代後半以降、ワロンとピアジェが共有した問題意識は、運動的思考と理性的思考の関係はどのようなものであり、前者から後者への発達の移行をどう理論的に解明するかという点にあった。ピアジェは、1930年代に自らの3人の子どもの具体的な観察に基づく乳児の思考研究へと進み、この問題への彼なりの解答を提示したのであった(1936年「子どもにおける知能の誕生」、1937年「子どもにおける実在の構成」)。一方、ワロンは1942年に、同様の問題に理論的な考察を加えた著書「De l'acte à la pensée (行為から思考へ)」を発売し、この中で特に「知能の誕生」を念頭においたピアジェ批判を展開した。その要点は以下のようである。

1. ピアジェの新しさ

1940年代初頭のワロンに見えていた従来の心理学とは意識の心理学であり、そこでは意識はその出発点に知的な心像という基本要素を仮定して組み立てられたり、感性的な要素を基本的なものとして構成されたりした。このようにはじめから閉じた個体の中に心的なものの存在を仮定して意識の発生と展開を説明しようとする心理学に代えて、ピアジェは精神生活の根本要素を運動におく新しい心理学を提起したのであった。ワロンは、ピアジェのこの新しさを高く評価する。運動を意識以前の根本要素と認めて、知的な機能に限定されていたとはいえ、主体の環境への外的活動(=運動)の展開とその漸次的組織化を通して意識へと至る過程を発生的に説明しようとしたピアジェの理論は画期的であった。ピアジェが、発達の出発点においた運動的スキーマは、もともと環境に対して能動的性質を有するゆえに、受動的な感性的要素を出発点においた場合に失われた意識の自発性や克服的性質が救われることになる。

2. 運動的水準と心的水準の連続性と非連続性

ピアジェによれば、主体と環境との相互作用を通して運動的スキーマは複雑な全体的システムへと組織化されていき、やがてそれは心内化するというのだが、では、このような心内化はどのようにして可能となるのだろうか。

か。ピアジェは、生物学的活動と運動的活動と知的活動の3者には、生活体の環境との関係にみられる本質的な機能(同化と調節)が共通の不変項として存在していることを指摘し、これによって移行の問題を回避しようとする。異なる水準間の垣根は共通性の指摘によって全て取り払われると考えているかのようである。ワロンにとっては、このような運動的水準と心的水準の間の機能的連続よりも、両者の非連続性こそが問題である。ワロンによれば、人間の環境とは、ピアジェの考えるような感覚運動的活動の向けられる物理的環境だけでなく、人間自身が生み出した表象に基づく環境でもあり、2つの環境に対する反応様式やそれぞれの環境に固有な動機は異なっていて、両者の間には共存、競合、矛盾、葛藤がみられるから、前者の環境に適合する活動から後者の環境に適合する活動(この場合はシンボリック的活動)が直接生まれるのではないとされる。運動的スキーマの自立的展開だけから心的なものが予定調和的に発生すると説くピアジェの説はこうして厳しくワロンによって批判される。

3. ピアジェの発生的説明のロジック

ワロンは、さらに、ピアジェが「知能の誕生」で展開した感覚運動的知能の発達過程の説明を綿密にたどることによって、ピアジェの発生的説明のロジックを暴く。ワロンによれば、ピアジェは、時間的な先行性(priorité temporelle)と構成上の優先性(priorité constitutive)を同じと考え、先行する段階に後の段階に現れる結果と同型のをあらかじめ認めておいて、この2つの時間的先行関係を発生的説明として置き換える。だから、ピアジェにおいては、運動的スキーマによって後の理性的思考の基盤となる論理構造の発生が説明されているように見えるが、実は、あらかじめ運動的スキーマを後の論理構造の諸性質をモデルとして浮き彫りにしておいて、しかる後に後者に対する前者の先行性と同型性を後者の発生の“説明”としているだけなのである。

以上のように、ワロンのピアジェ批判は非常に鋭い。しかし、では、運動的水準と表象的水準の非連続性を踏まえたワロン自身の表象発生論がピアジェのそれに十分対置されて展開されたかというところとそうでなく、いくつかの重要なアイデアの示唆的提示にとどまった。